



紙のツキノワ

In order to wish the safety of traffic society

ツキノワの未来、交通のミライ

Interview makino, daisuke

取材・文・写真 佐倉寛治



今風に言えば激コワ、激ムカ。かつての教習所指導員のパブリックイメージと云えば、こんな言葉が聞こえてくるだろう。しかし、ゼロ年代を経てテン年代半ばに差しかかった今に、その価値観を呆気なく崩壊させ、新たな指導員のイメージを再構築し、教習をネクストステージに押し上げる男がいる。彼の名は、牧野大輔。もうかつてほどの若さはないが、その教習方法は円熟味を増し、自我を包み隠す。その経験値の上昇した無垢な姿に迫ってみたいと思う。

終わりが無い、ゴールがない、100%がない、完成しない安全運転。

■あらためて、歩いてみると広いコースですよ。

牧野大輔指導員（以下牧野）：一応、滋賀県で一番広い教習所のコースなんです。教えがいは、すごいありますね。特に、直線の加速なんかは。50kmまで大型トラックでも出せますからね。ほんと、すごいですよ。

■やはり、その広いコースや校舎の魅力にひかれて、教習所は月の輪を選ばれたのですか？

牧野：いや実は、就活の時期に付き合っていた彼女が、月の輪に通っていて、指導員を募集していたことを教えてくれたことが、きっかけなんです。それで、気がつけば17年ぐらい：ほんと、その彼女には感謝しなきゃいけないですよ（笑）

■実際指導員になってみて、どうでしたか？

牧野：一生できるなあ…と思いましたがね。資格取って、教習をやりはじめるとすぐに直感で。だって、終わりが無いじゃないですか、安全運転って。ゴールも見えない、完成しない、100%がない。

検定のふるい。その基準が決まっている中で、自分の意思を反映させる。

■なるほど。では、終わりのないものを教える苦労は相当ですよ。

牧野：無いと云えば、無いのが実のところ。楽しんでしまうんですよ、教えること。どうすればいいか？と悩むことはありますが、検定する時は特に。

■検定業務で普段から、忙しそうですよ。教習生の多くの方の心配は、検定合格ですが、それはどう思われますか？

牧野：検定って、用はふるいにかけられるって事。もちろん、そのふるいは、どの検定員も一緒



です。その水準を教習所として保つのは難しい。でも、ふるいの基準が決まっている中で、自分の意思も反映させています。ちなみに、狭路のSとクランクってあるけど、どっちが難しいと思います？

■やっぱり、直角カーブでポールが行く手を阻むクランクですかね。

牧野：私は、やっぱりSですね。難しいというより、教えていて面白いです。ハンドルのうまさ、カーブの曲がり具合、道路状況と自車の観察。これらを統合して無駄のないSの通り方ができると思っていますよ。

■さすが、完璧な回答。感服します。やっぱり、運転でも失敗なんてありえないですよ。

牧野：いや、そんなことないですよ。昔は結構色々なことをやらかしていますよ。例えば、車内が異様に臭くて、なんでかなと思ったら、ハンドブレーキを引いたまま、ずっと走っていたみたい。京都の祇園から太秦まで（笑）みなさんは、こんな失敗しないでください。

